

外郎売りの科白

二代目 市川団十郎

○ 拙者親方と申すは、お立会いの中に、ご存じのお方もござりましょうが、お江

戸を立って二十里上方、相州小田原、一色町をお過ぎなされて、青物町を登りへお

出でなさるれば、欄干橋虎屋藤右衛門、只今は剃髪いたして、円斎と名のります。

元朝より大晦日まで、お手に入れますこの薬は、昔ちんの國の唐人、外郎とい

う人、わが朝へ来たり、帝へ参内の折から、この薬を深く籠め置き、用ゆる時は一

粒づつ、冠のすき間より取りい出す。依って其の名を、帝より、「透頂香」と賜る。

即ち文字には、「いただき・すぐ・におい」と書いて、「とうちんこう」と申す。

只今はこの薬、殊の外世上に広まり、ほうぼうに似せ看板をい出し、イヤ小田原

の、灰俵の、さん俵の、炭俵のと、色々に申せども、平仮名を以って「ういろう」

と記せしは、親方円斎ばかり。

もしやお立会いの内に、熱海か塔の沢へ湯治においてなさるか、又は伊勢参宮の

折からは、必ず門ちがいなされまするな。お登りならば右の方、お下りなれば左側

八方が八つ棟、おもてが三つ棟、玉堂造り、破風には菊に桐のとうの御紋を御赦免

有て、糸岡正しき薬でござる。

イヤ最前より家名の自慢ばかり申しても、御存じない方には、正身の胡椒の丸呑

み、白河夜船、さらば一粒食べかけて、其の気見合いをお目にかけましょう。

まずこの薬を、かように一粒舌の上にのせまして、腹内へ納めますと、イヤど

うも言えぬわ、胃・心・肺・肝がすこやかに成って、薰風咽より来たり、口中微涼

を生ずるが如し、魚・鳥・きのこ・麺類の喰い合わせ其の外、^{まんびようそつこう}万病速効あること神
の如し。

◎ さて、この薬、第一の奇妙には、舌のまわることが錢ごまがはだしで逃げる。

ひよと舌が廻りだすと、矢も楯もたまらぬじや。そりやそりや、そらそりや、

まわって來たわ、まわって來るわ、アワヤ喉、サタラナ舌に、力牙、サ歯音、

ハマの二つは唇の輕重、開合さわやかに、アカサタナハマヤラワ、オコソトノホモ

ヨロオ。

一つへぎ、へぎに、へぎほしはじかみ。盆豆・盆米・盆ごぼう。摘み蓼・つみ豆・
つみ山椒。書写山の社僧正。小米の生噛み、小米の生噛み、こん小米のこなまがみ。

繡子・ひじゆす・繡珍。親も嘉兵衛、子も嘉兵衛、親かへい子かへい、子か

へい親かへい。古栗の木の古切口。

雨がっぱか、番合羽か。貴様のきやはんも皮脚絆、我等がきやはんも皮脚絆。し

つかわ袴のしつぽころびを、三針はりながにちよと縫うて、ぬうてちよとぶん出せ。

かわら撫子・野石竹。のら如来、のら如来、三のら如来に六のら如来。一寸さき

のお小仏に、おけつまずきやるな。細溝にどじょによろり。

京の生鱈、奈良、生まな鰹、ちよと四五貫目。お茶立ちよ、茶立ちよ、ちゃつと
立ちよ、茶立ちよ、青竹茶箭でお茶ちゃと立ちや。

来るわ来るわ、何が来る、高野の山のおこけら小僧。狸百匹、箬百ぜん、天目百
ぱい、棒八百本。武具・馬具・ぶぐ・ばぐ・三ぶぐばぐ、合わせて武具・馬具・

六ぶぐばぐ。 菊・栗・きく・くり・三きくくり、合わせて菊・栗・六きくくり、

麦ごみ・むぎ・ごみ・三むぎごみ、合わせて麦・ごみ・六むぎごみ。

あのなげしの長なぎなたは、誰がなげしの長なぎなたぞ。向こうのごまがらは、

荏の胡麻殻か、眞ごまがらか、あれこそ、ほんの眞胡麻殻。

◎ がらぴい、がらぴい、風車。おきやがれこぼし、おきやがれ小法師、ゆんべも
こぼして、又こぼした。たあぶぼぼ、たあぶぼぼ、ちりから、ちりから、つたつ
ぼ。たっぽたっぽ干だこ、落ちたら煮て喰お。煮ても焼いても喰われぬ物は、五徳・

鉄きゅう・金熊どうじに、石熊・石持・虎熊・虎きす。中にも、東寺の羅生門には、
茨木童子が、うで栗五合つかんでおむしゃる、かの頬光のひざ元去らず。

鯵・きんかん・椎茸、定めてごたんな、そば切り・そうめん・うどんか、愚鈍な
小新発知、小棚のこ下の小桶に、こ味噌がこ有るぞ、こ杓子こもって、こすくって
こよこせ。おつとがてんだ、心得たんぼの、川崎・神奈川・保土ヶ谷、戸塚は、走
って行けば、やいとを摺りむく、三里ばかりか、藤沢・平塚、おおいそがしや、小
磯の宿を、七つ起きして、早天そうそう、相州小田原とうちん香。

隠れござらぬ貴賤群衆の、花のお江戸の花ういろう。あれ、あの花を見て、お心
をおやわらぎやつといふ。産子・這う子に至るまで、此のういろうの御評判、御存

じないとは申されまいまいつぶり、角出せ、棒出せ、ぼうぼうまゆに、うす・杵・
すりぼら、ぼりぼらぐあらぐあらぐあらと、羽目をはずして今日おいでの何れも様
に、上げねばならぬ、売らねばならぬと、息せい引っぱり、東方世界の薬の元締、
薬師如来も上覧あれと、ホホ敬って、ういろうはいらっしゃりませぬか。

アウ・イウ・ユウ・オウ / アウ・イウ・エウ・オウ / マウ・イウ・オウ

ヤー

ア エ イ ウ エ オ ア オ
カ ケ キ ク ケ コ カ コ
サ セ シ ス セ ソ サ ソ
タ テ チ ツ テ ド タ ト
ナ ネ ニ ヌ ネ ノ ナ ノ
ハ ヘ ヒ フ ヘ ホ ハ ホ
マ メ ミ ム メ モ マ モ
ヤ エ イ ユ エ ョ ャ ョ
ラ レ リ ル レ ロ ラ ロ
ワ エ イ ウ エ オ ワ オ
ガ ゲ ギ グ ゲ ゴ ガ ゴ
カ ケ キ ク ケ ゴ ガ ゴ

アイ ウ エ オ ア オ
カ キ ク ケ コ カ コ
サ シ ス セ ソ サ ソ
タ チ ツ テ ド タ ト
ナ ニ ヌ ネ ノ ナ ノ
ハ ヒ フ ヘ ヘ ホ ハ ホ
マ ミ ム メ モ マ モ
ヤ イ ユ エ エ ョ ャ ョ
ラ リ ル レ ロ ラ ロ
ワ イ ウ エ エ オ ワ オ
ガ ギ グ ゲ ゴ ガ ゴ
カ キ ク ケ ゴ ガ ゴ

あー青巻紙 黄巻紙 赤巻紙
えー縁の下の杭は 引き抜き

にくい抜きにくい

おーお綾や親にお謝りなさい

おーお前の前髪 下げ前髪

かー蛙ひよこひよこ

三ひよこひよこ

合わせてひよこひよこ

六ひよこひよこ

かー貨客船の旅客

かー鴨が米噛みや

小鴨が小米噛む

きー貴殿の頭は禿げ頭

拙者の刀は鎧刀

くー潜り難い潜り窓くぐって

くー栗の木のくぐり戸は

くぐりにくい

【ことば遊び辞典】より

さー作者の脚色 役者の約束

たー第五交響曲に観客驚愕

たー竹屋の竹垣に竹立て掛けた

とー東京特許許可局

とー隣の客はよく柿食う客だ

なー生米生麦生卵

ひー飛脚柿むくお客様柿食う

ひー広島の紐で火鉢をしばる

ふー武具馬具武具馬具

三武具馬具 合わせて

武具馬具 六武具馬具

ふー古栗の木の古切り口

ほー坊主が屏風に坊主の上手な

絵をかいた

みー右の耳から耳輪を3つ

むー無理に結んだ結び目6つ

鈴木棠三著 東京堂出版

ういろうううり

外郎壳の口上研究会

▶小田原市

滑舌鍛え

みんなでやれば
もっと楽しい



☆外郎壳の口上研究会事務局(FMおだわら)☎0465(35)5150。「外郎壳の口上大会」=8月21日午後2時、小田原市民会館大ホール(小田原駅徒歩10分)。説明会=6月5日午後1時／12日午後3時、おだわら市民交流センターUMECO(ウメコ)(小田原駅徒歩3分)。詳細はHP。



「外郎壳の口上」は、歌舞伎役者の二代目・市川団十郎が小田原名物の薬「ういろう」で、痛めた喉が回復した経験を自作し演じたのが始まり。早口言葉など滑舌を鍛える要素が盛り込まれ、アナウンサー役者が盛り込まれ、アナウンサー役者が

の訓練に活用されている。

研究会では「お江戸を立って二十里上方、相州小田原一しき町をお過ぎなされて…」と、地元にゆかりのある「口上」を声に出して表現することを追求する。抑揚や身ぶりなどを自由に作って芝居やミュージカルへ展開し、各種イベントに出演している。

「目線を正面に」という教えに沿って姿勢を正すと、大きな声が出て爽快な気分になった。8月21日には、同市内で「外郎壳の口上大会」が開かれる。同会の太田雅江さん(65)は、「みんなで声を出すともっと楽しいですよ」と参加を勧める。

